

「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話開会挨拶

(2017年8月31日、外務省)

●皆さん、今日は。グローバル・フォーラム代表世話人の伊藤憲一でございます。グローバル・フォーラムにとっては、2015年につづき再び「中央アジア・プラス・日本」対話を外務省との共催により開催することができ、大変喜んでおります。中央アジア5か国と米国からご参加をいただいた発表者の皆さまには、改めて心からの歓迎の意を表したいと思います。

●さて、冷戦時代、中央アジアが「鉄のカーテン」の向こう側にあって、われわれ西側世界の住民にとって近寄りがたい国々であったころ、私は約1カ月をかけて一人で中央アジア5か国をすべて訪ねたことがあります。今から半世紀以上昔の1963年のこと

でした。当時私はモスクワの日本大使館で外交官補、というか研修期間中の大使館員として、「勉強のため、中央アジアを見て来い」と言われて、アルマアタを皮切りに、フルンゼ、ドウシャンベ、タシケント、ブハラ、サマルカンド、アシュハバードなどの諸都市を歴訪しました。いずれの都市も中心街はマルクス・レーニン通りと名付けられていたのが、印象的でした。

●当時は冷戦時代まっただ中でありまして、西側大使館員がソ連国内を旅行するときは、身の安全を守るために、必ず何人かでグループを作って行動をとりにしたのですが、私は単独で1か月近く、いわばほっつき歩いたわけです。当時私はまだ25歳でしたし、ロシア語ができましたので、この旅行ではすぐ現地の人たちと友達になり、家に連れて行かれて、食事までご馳走になったこともありました。中央アジア諸国には、それなりの独特の伝統と文化と人情のあることを現地で実感しました。

●ということで、中央アジアは私にとって格別に思い入れのある場所なのですが、その後、切れていたご縁が復活していることをご報告したいと思います。というのは、ソ連解体の後、私が理事長をしている外交問題シンクタンク・日本国際フォーラムは何人かの中央アジアの青年たちを客員研究員としてお迎えするご縁を得たからです。かれらと国際情勢を議論し、むしろ教えられることが多かったのは、意外でした。中央アジアが世界を見る眺望台の一つであることは、間違いありません。今日は日本と中央アジア各国との外交関係樹立の25年の軌跡を振り返りつつ、この対話を一つの契機として両国関係が一層発展することを祈念してやみません。以上、開会のご挨拶とさせていただきます。ご清聴有難うございました。